

「ジェンダー研究のフロントティア」の構築

生活科学部教授 戒能 民江

(拠点リーダー)

このたび、21世紀COEに、本学の「ジェンダー研究のフロントティア」が地域・国家・グローバルな再構築が採択された。ジェンダー研究センターと大学院ジェンダー論関連専攻を中核に、学内外での多彩な学問分野の連携をはかりながら、今後五年間の事業を展開する。日本におけるジェンダー問題のみならず、グローバル化のなかでの新たな課題にも取り組み、アジアから発信するジェンダー研究教育拠点をめざす。次世代研究者の育成も大きな課題である。若手研究者に対しては、公募研究などの自発的研究活動の支援や研究プロジェクトへの実質的参画促進をはかる。本プロジェクトは九月にスタートを切った。ジェンダー研究の裾野を広げるとともに、昨年採択のCOE「誕生から死までの人間発達科学」とも連携しながら、本学のいっそうの活性化に努めたい。全学のご支援をお願いします。

URL <http://www.igs.ocha.ac.jp/f-gens/>

大学見学会参加者の印象

(様子は表紙写真参照)

世田谷区 高校三年 河野 瑛美
強く感じたのは学生の皆さんの熱意です。全員が目標を持っていて、大学で学ぶことが本当に楽しくて充実していると話してくれました。前から心理学を学んでみたかったのですが、今日ますますその気持ちが強くなり夢も具体的になりました。

志賀高原体育運動場の思い出と現況

生活環境研究センター教授 近藤 和雄



昭和30年撮影の旧施設（昭和13年建造）

昨年から研究室のゼミ合宿を志賀高原の発哺にあるお茶の水女子大学の山小屋で七月末に始めた。真夏の暑さを忘れさせ、温泉を楽しむ環境を、私達だけのグループだけで独占する幸せを、もう二回も満喫している。こんな良い場所をなぜ知らなかったのか。山小屋の前でパーベキューをしながら、夜空の星をながめながらの学生達の声である。この山小屋は、今から六五年前の昭和十三年に当時の東京女子高等師範学校教授（佐々木等氏）の尽力で出来たものである。当時、発哺には、薬師の湯、天狗の湯と山小屋の三軒の

新津市 高校三年 吉田 恭子

私は初めてお茶の水女子大学に来て、まさしく皆さんの緑に囲まれていて、その多さにとっても驚きました。そして虹を数式で表すという思いもつかない講義はとても興味深かったです。また教授や在学生に話を伺うことができ、とても参考になりました。お茶の水女子大学では、この環境の中で、様々な人に出会い、様々な事を経験し、学べるのではないかと思いました。とてもよいオープンキャンパスでした。

雪に包まれた現在の施設



みであったこともあってお茶の水女子大の山小屋の名は、志賀高原で知らない人はいない。私が発哺を初めて訪れたのは、昭和三十一年頃の真夏の一時で、発哺は霧の中にあつた。下界の暑さを忘れさせる涼気を今も鮮明に覚えていて。次に発哺を訪れたのは、附属中学の時の夏の林間学校の時であつた。初めて足をふみ入れた山小屋は、すべて木造の山小屋で、スキーヤーズベット、ドラのぶらさがる食堂、薄暗く湯の花の多い温泉が、岩菅山登山、池めぐり、蓮で繁った蓮池でのボート遊びなどとなつかしく思い出される。

冬の志賀高原は、スキーヤーにとつてまさしくメッカである。その日本で随一の規模を誇るゲレンデのど真ん中に山小屋は建っている。しかも、初級者から超上級者まで楽しめる位置にある。スキーを楽しむのにこんな便利な場所は他にないと言つても過言ではない程の場所である。ここ十年来、私はこの山小屋でお茶大に来る前から家族でスキーを楽しんでいる。現在の山小屋は、昭和四五年に新しく建て直されたものである。管理人も小林夫妻から二代目の山本夫妻に変わって十年以上経過している。最近では、風呂場にシャワー、西洋式トイレの導入など、設備にかなりの改善がみられ、昔を知る人には今昔の感があるのではないかと。それにしても、昔かならずいた長期滞在のお茶大生が、最近は見られなくなつた。さびしい気がする。